

アラカルト

協同組合 関東給食会



中村律子さん

ritsuko nakamura

事業環境変化 著しい組合員を 縁の下で支えたい

「組合の基本は相互扶助、助け合いであると学んだとき、なるほどと納得し、これからの私の仕事の根本にしようと思ったのです」と、組合検定の試験勉強で得たことを現在も仕事のモットーにしていると語るの
は、協同組合関東給食会の中村律子さんである。

●気楽に受けるつもりが…

中村さんが組合検定試験を受験したのは平成16年である。平成11年に同組合に入職した頃から「組合士という資格は知っており、いつか受けてみよう」と思っていたという。たまたま関連する全国団体の女性職員から「一緒に受けてみない」と誘われて、「仲間がいれば講習会通いなどの勉強も続けられる」とトライを決めた。その決意を聞くと、組合役員も検定料を組合負担にするなど熱心に応援してくれたが、逆に「絶対、失敗できない」と勉強に熱が入ったとのこと。その甲斐あって、見事に初回で合格、資格の取得を果たした。

元々は民間で経理を担当していた中村さんには、この受験が「組合を知る」よい機会になったという。特に、組合関連の法律や運営については学んだことで組合について基礎を学ぶことができ、それが冒頭の発言にも現れているとおり、組合職員としての中村さんのバックボーンにもなったのである。

●多様な活動を展開する組合

当組合には関東1都10県の給食関連食材納入業者22社が集まる。そもそもは昭和41年に、小規模事業者が大手食品メーカーと安定的な取引を行うことを目的に設立したという経緯を持つ。設立以来、共同購買事業などを積極的に展開してきたが、近年は部会活動が盛んとなっており、特に、農産物部会、商品開発部会、食育推進研究事業部会の3部会は、PB商品をメーカーと共同開発するなど活発に活動している。これらの部会は組合員各社の若手社員が参加して運営しており、こういった若い力が組合活動の新たなパワーとなっている。

また、設立40周年を迎えた年からはカンボジアにカンキュー学校を設立して地元の子どもの学習活動の支援を行っており、ほぼ毎年、組合員各社からの若手社員も参加して多様なボランティア活動を展開している。

最近では組合員への情報提供にも力を入れており、情報事業部会を中心に勉強会などを開催し、食の安全・安心について理解を深める活動も進めている。

●設立50周年を目前に更に先を見つめて

組合は設立以来、組合員への配当を欠かさないなど恵まれた状況にあるが、少子化傾向が止まらない中、給食を巡る事業環境も厳しくなっている。そのため、組合員同士がエリアを越えてライバル関係に立つといった事態も生じているという。しかし、若手を中心とした部会活動が活発化する中で、連携できることは連携して協力していこうという気運が高まってきている。

組合では、そういった若手の参加も募って視察や勉強会を企画し、交通費などの費用を負担するなど従来にも増して熱心な活動を展開している。「部会活動を通じて若手社員が組合という存在の意義を理解してくれていると実感しています。また、会社の枠を超えたコミュニケーションの円滑化にも役立っているようです」と、企画に運営にと縁の下の力持ちとして活動を支える中村さんも、忙しさにうれしい悲鳴をあげながらサポートに取り組んでいる。

「若い人してみると、社長や組合役員には進言しにくいことも、事務局の私なら身近に感じて気軽にいろいろ相談してくれているみたいです。組合員のみなさんや若い人がやりたいことをやりやすくできるように、私は裏方に徹していだけけです」と中村さん。3年後に設立50周年を迎える中、組合が次代の活動を展開できるように、女性ならではの気配り目配りでサポートする日々である。